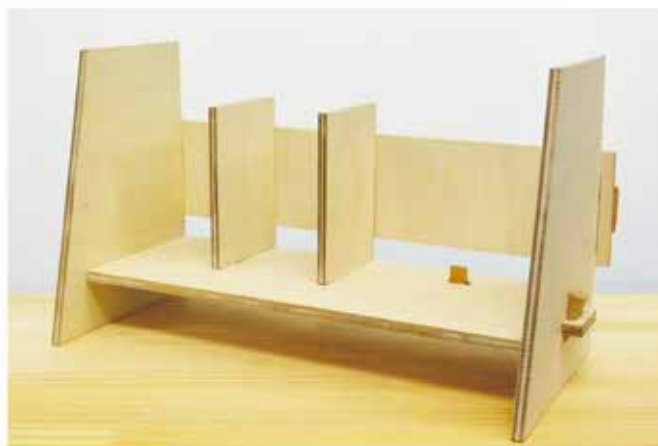


ポローニア

paulownia



棚のデザインと製作：「はれっと」羽生優月(左)、「CDスタンド」中山哲志(右上)、「あたたかみのあるたな」新井慧美(右下)（附属高校1年 工芸）

目次

教育長挨拶

巻頭言「はじめまして」◆濱本悟志……………2

附属学校児童生徒の共同生活 ～黒姫高原から三浦海岸へ～
◆黒姫高原・三浦半島共同生活教職員実行委員会……………2

区立幼稚園との交流活動 ◆若井広太郎……………3

院戦（対学習院総合定期戦）◆鮫島康太……………3

神奈川県特別支援学校体育連盟主催の
陸上競技夏季記録会 ◆河場哲史……………3

宮城の風を感じる「東北地域研究」◆小佐野浅子……………4

インドネシアの高校生との交流から世界とつながる
◆福田美紀・吉岡 静・高畑啓一……………4

自然と世界遺産を訪ねて ～小学部修学旅行～ ◆森山弘和…5

沖縄修学旅行 2018 ◆大川原 恒……………5

生徒による学校紹介 ◆多田義男……………6

附属小学校の公開授業・研究発表会
ー研究テーマ「きめる」学びー ◆夏坂哲志一……………6

「自立教科担当教員（理療）講習会（教員免許状更新
講習を兼ねる）」開催 ◆和田恒彦……………7

関東甲信越地区 視覚特別支援学校・盲学校
歩行指導者研修会について ◆明比庄一郎……………7

附属学校教育局主催「教員研修会」
附属学校 研究発表会……………8





SATOSHI
HAMAMOTO

はじめて、ポローニアの巻頭言を執筆します。本誌は2004年10月に、附属学校及び附属学校教育局の活動を紹介する広報誌として創刊されました。縁あって、リニューアルを目指した第27号（2013年5月発行）から編集に携わってきましたが、まさか自分自身が巻頭言を依頼され、原稿を催促する側からされる側になるとは夢にも思っていませんでした。

本誌は、各附属学校の特色ある教育活動や学校群としての協働活動を、伝統的な全人教育、先導的な教育、国際教育、教師教育等の観点から紹介する広報誌で、そこには一貫した編集方針があります。それは、どの活動も幼児・児童・生徒たちがワクワクしながらイキイキと取り組む様子を中心に伝えることです。子供たちの表情こそが、教育の成果を如実に物語っていると考えからです。そのため、表紙で子供たちの作品を紹介し、本文にもできる限り子供たちの声と画像を取り入れています。

『ポローニア (paulownia)』は本学の校章にも描かれている桐の学名で、生長が早く、種は風に乗って各地に広がり繁殖すると言われています。桐のように、本誌では成長する子供たちのワクワクとイキイキをお伝えし、教育の成果が多くの教育現場に広がり、そして活用されることを切に願っています。



附属学校児童生徒の共同生活 ～黒姫高原から三浦海岸へ～

黒姫高原・三浦半島共同生活教職員実行委員会

今年も7月29～31日に2泊3日の第4回黒姫高原共同生活を実施

し、附属学校10校の児童生徒74名と教職員31名が黒姫山麓の大自然のなかで活発に活動し、交流を深めました。

1日目は、バス移動（ゲーム等で交流しながら）→開校式→野外炊飯（カレーづくり&焼きそば）→館内交流（ゲーム「利きジュース」等）。2日目は、朝の体操→自然散策「森のアドベンチャー」→昼食→アイスクリームづくり&思い出の作品づくり→夕食→キャンドルファイヤー・花火・星空観察。3日目は、朝の体操→「野尻湖ナウマンゾウ博物館」見学→バス移動→閉校式。

5月に発足した実行委員会の生徒たちは、各種の企画立案とともに、“みんなが楽しむ”を常に追求し、仲間づくりや情報保障などについて議論を重ねてきました。

来年度からは、安全面、費用面、移動時間等を考慮し、多くの児童生徒が参加しやすい三浦海岸に開催地を変更します。その試行として、8月28～29日に新たに附属久里浜特別支援学校の児童を迎え、児童生徒28名と教職員21名で共同生活を実施しました。1日目は、野外炊飯（ピザ&焼きそば）→ビーチ活動（スイカ割も）→夕食→キャンドルファイヤー&ビニール傘アート。2日目は、じゃんぐる体操→シーカヤックに挑戦→昼食→現地解散。

いま、附属学校群の共同生活は、4年間の黒姫高原での貴重な体験を引き継ぎ、山から海へと船出することになりました。

三浦海岸共同生活での
シーカヤックに挑戦





区立幼稚園との交流活動

附属大塚特別支援学校 幼稚部 若井広太郎

附属大塚特別支援学校幼稚部では、文京区立後楽幼稚園との交流活動を行っています。年間5回程度の交流活動の中で、幼稚園と幼稚部のそれぞれの場にお互いが行き来し、園庭での自由遊びや設定保育などの活動を行います。継続的に交流活動を行う中で、お互いの顔や名前を覚えたり、親しくなった幼児同士で一緒に遊んだりするなど、子ども同士の関係性にも広がりや深まりが見られています。この数年では音楽的な活動による交流を行い、普段それぞれの園で歌っている歌や踊っているダンスなどを紹介しあって一緒に楽しんでいます。「どっこいしょーが、楽しかった!」「みんなで(リズムを合わせて鳴子を)鳴らせた!」という感想が幼稚園の園児からも聞かれ、一緒に活動をすることの楽しさや達成感がお互いに感じられるよい機会になっています。



院戦(対学習院総合定期戦)

附属高等学校 教諭 鮫島康太

19の部活動が対抗戦を行う学習院高等科・女子高等科との総合定期戦は「院戦」と呼ばれ(学習院側は「附属戦」)、今回で68回を数える伝統ある行事です。

今年度は6月2日(土)、本校を主会場として行われました。院戦は、運動部の日頃の取り組みを友人や教職員、保護者や卒業生に披露する場であり、多くの部では3年生の最後の晴れ舞台となっています。選手が全力でプレーする姿に送られる大声援で各会場は大賑わい。また、有志で結成される両校の応援団による応援合戦も見ごたえ十分でした。正式種目とは別に一般種目が用意され、より多くの生徒同士が交流する機会にもなっています。

今年度の総合成績は「引き分け」。来年こそは勝利すべく、各部活は新たなスタートを切っています。



神奈川県特別支援学校体育連盟主催の陸上競技夏季記録会

附属久里浜特別支援学校 教諭 河場哲史

7月27日(金)に、陸上競技夏季記録会が、横浜市の三ツ沢公園陸上競技場で開催されました。本校小学部から16名(1年生6名、2年生4名、4年生3名、5年生2名、6年生1名)の児童が、50m走(児童15名)と100m走(児童1名)に、それぞれ参加しました。初めて記録会に参加する児童は、陸上競技場の雰囲気ドキドキしながらも、ゴールまでしっかりと走りきることができました。また、参加経験のある児童の大半がタイムを縮めることができました。ゴールテープを切ったときのガッツポーズや、走りきった満足感たっぷりの笑顔が印象的でした。記録会当日は、大変暑い中でしたが、参加児童全員が最後まで走り抜くことができました。

渾身のガッツポーズ!



すてきな笑顔でゴール!

宮城の風を感じる 「東北地域研究」

附属駒場中 教諭 小佐野浅子

中学2年の2学期から中学3年の1学期、約1年間にわたって取り組む東北地域研究の柱は、3つあると考えています。

1つ目は、フィールドワークとそれに向けての取り組みです。班ごとにテーマを決め、研究課題に基づいて企業や役所を選出し、アポを取り、訪問に至るまでの過程です。事前学習を含む活動の多くは、生徒が主体的に取り組み、訪問も生徒のみで行っています。現地訪問は、毎年中学3年の5月下旬に3泊4日で実施しており、今年度は宮城県を訪問しましたが、テーマの一例を挙げれば、こけし、スポーツ、ホヤ、災害伝承、温泉、ふるさと納税、まちづくり等。実に多岐にわたります。

2つ目は、震災学習です。3.11以降、震災学習を行っており、被災された方の声を聞き、被災地を実際に歩き、見て、感じて、そして考える場を設けています。東京にいたのでは届きにくい現地の声や現状を目の当たりにすることは、生徒たちに衝撃を与え、そして自分にできることを模索し、これからの災害支援等を考えるきっかけとなっています。

そして3つ目となるのが、7月に行う研究発表会です。PCを駆使して作成したポスターを元に、全員がプレゼンを行います。発表会には校内の先輩・後輩だけでなく保護者の方も参加していただいています。研究成果とともに生徒自身の体験を語ったり、質疑も積極的に行われたりするなど、非常に活況を呈していました。

東北地域研究の過程に一つ一つ取り組んでいくことで、生徒たちは確実に成長しています。



インドネシアの高校生との 交流から世界とつながる

附属坂戸高等学校 教諭

福田美紀・吉岡 静・高畑啓一

2014年に科学技術振興機構 (JST) が始めた「日本・アジア青少年サイエンス交流事業 (愛称: さくらサイエンスプラン)」の一環として、6月21日 (木) にイン



ドネシアの高校生が附属坂戸高校に来訪しました。当日は田村憲司校長による土壌に関する特別授業や、インドネシア語講座の受講生とのランチ、通常授業への参加など、充実した交流の時間を持つことができました。

土壌特別授業では、本校敷地内にある里山造林地を活用し、土壌の調査体験が行われました。サポート役で参加した3年生も「インドネシア高校生が興味を持って自分の話を聞いてくれたので嬉しい」と話すなど、自分が勉強してきたことが役に立つ経験が出来、良い機会となりました。

ランチセッションでは、インドネシア渡航経験のある生徒やインドネシア語受講生が積極的に交流していました。話題は両国の高校生活のことから環境問題についてなど多岐にわたり、時間の許す限り会話を楽しんでいました。

ランチ後にはインドネシアの高校生による伝統的な踊りや武道の披露があり、大いに盛り上がりました。その後「国際社会」と「日本語日本文化演習」の2つの授業に分かれて参加してもらいました。「国際社会」では国連の持続可能な開発のための目標 (SDGs) について学び、英語でディスカッションを、「日本語日本文化演習」では、日本文化紹介としてポスターを用いながら源氏物語の紹介をしました。今回の交流をきっかけに世界とのつながりを意識できた、大変有意義な交流の機会となったと思います。



生徒による学校紹介

附属中学校 教務部 多田義男



平成30年7月7日(土)に小学4年生～6年生の児童及び保護者の方々を対象にした「生徒による学校紹介」(以下学校紹介)を午後に2回実施しました。この学校紹介は今年度で3年目を迎え、昨年度からは同日の午前に公開授業を行っています。

学校紹介は、本校に在籍している生徒たちが、自分の学校の教育内容を、生徒の視点で外来者の方々へ紹介をすることを目的として行われています。委員長陣(生徒会役員)による挨拶にはじまり、普段の授業の様子がわかる発表や、各コース別に行われる修学旅行の概要説明などを行いました。そして、今年度の新たな企画として「僕たちはどう生きるか」という在生徒と、卒業生(大学生1年生)によるシンポジウムを行いました。

司会から大学生のシンポジストに「どうやって大学を決めたのか」など中学校を卒業後の話に触れたり、中学生のシンポジストへは「中学入試の勉強の秘訣は何か」など参観者が知りたい

内容を聞いたりしました。在籍生徒や卒業生からの様々な話を通して、本校のありのままの姿をご覧いただくことができました。感想の一部を紹介します。

- ・生徒の皆さんの話し方がとてもしっかりしている。挨拶が元気でよい。
- ・シンポジウムでは受験生の目線に沿って話を進めていただき、とても参考になった。

この日の外来者は1800名を超えましたが、在校生も元気に挨拶するなどいつも以上に丁寧に張り切って対応していました。

これからも、多くの方に本校の良さを伝える機会を作っていきたいと考えています。



附属小学校の公開授業・研究発表会 —研究テーマ「きめる」学び—

附属小学校 教諭 夏坂哲志



附属小学校では、研究の成果を毎年6月に研究発表会にて公開している。今年度は6月15日、16日に開催。午前中は授業を公開し、その後、全体発表や児童発表、各教科・領域ごとの分科会を行うという日程で、2日間にわたって行った。今年も全国から多くの先生方が足を運んでくださった。

現在の研究テーマは、「『きめる』学び」。チャレンジする意欲や冒険心が旺盛で、柔軟でしなやかな発想ができ、自分の力で粘り強く納得できる答えを見つけようとする「知的にたくましい子」を育てたいと考え、「きめる」をキーワードにして研究に取り組んでいる。

今年度は、第3年次の発表として、「きめる」学びの授業モデルについて提案することができた。

「きめる」ことが問題意識を生み、主体的に学習活動に取り組む子どもの姿を引き出す。そして、「きめる」ことによって、他者に伝えたいことや聞きたいことができ、そこに対話が生まれる。さらに、きめた課題や問題解決の方向性を振り返り、きめ直しながら追究活動を続けることにより、深い理解に迫ることができる。このように考えると、本研究において明らかになってきた授業づくりの視点は、新学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」の具体的な姿につながるものだとも言える。





自然と世界遺産を訪ねて～小学部修学旅行～

附属聴覚特別支援学校 教諭 森山弘和



小学部6年生は、5月17日、18日に、日光の世界遺産と奥日光の自然を巡る修学旅行に行ってきました。最上級生となって1ヶ月が過ぎ、責任ある生活にも少しずつ慣れて来た頃で、児童達はずっとこの日を楽しみにしていました。

一日目は浅草駅から電車で乗り、日光駅に着いてからは

バスで移動し、奥日光へと向かいました。途中雨も降りましたが、児童達の祈りが通じたのか、明智平では日光の山々がきれいに見えました。児童達は、奥日光の自然の雄大さに言葉を失っていました。

二日目は、世界遺産である日光の社寺を見学しました。家康の墓では、「階段が207段もあって大変だったけど、頑張ってたよかった。」という感想が聞かれました。また、眠り猫を見ることを楽しみにしていた児童は、「思っていたより小さかったけれど、見られてよかった。」と喜んでいました。

児童達は、事前学習で調べたことを元に、細部までしっかりと見学していました。

「百聞は一見に如かず。」

事前学習で、児童達は、日光について色々な事を調べていました。しかし、実際に見る奥日光の自然の偉大さや、世界遺産の社寺の荘厳さは想像以上で、児童達は見るもの全てに驚き、感動していました。

修学旅行の帰りの電車では、「みんなで一緒に、お話ししたり、風呂に入ったり、みんなで一緒に過ごせてよかった。」という感想も聞かれ、6年生としての絆を深められる旅行となりました。修学旅行で、仲間とともに自然や世界遺産に触れる経験を通して、「子ども達がまた一つ大人になった」と感じられました。



沖縄修学旅行 2018

附属桐が丘特別支援学校 教諭 大川原 恒

高校3年生は4月17日～20日の3泊4日の日程で、沖縄県に修学旅行に行きました。

朝7時に羽田空港に集合し、搭乗手続きを済ませた生徒から他の乗客より優先して乗り込みました。いよいよ離陸です。初めて飛行機に乗る生徒は2名でした。

那覇空港に降り、車いす用のリフトバスに乗り込みます。初めはひめゆりの塔を訪れ、バスガイドさんからこの地で起きた戦時中に出来事を伺いました。当時の凄惨な様子に生徒たちの言葉数も次第に少なくなり、涙ぐむ子も見られました。またバスガイドさんは通過する場所で起こった戦時中の出来事を、まるで目の前で起きているかのように説明して下さいました。生徒たちにとって実感を伴う有意義な平和教育になりました。2日目は美ら海水族館をグループ別に行動しました。3日目は首里城を見学し、沖縄発祥のアイスクリーム屋さんでアイスづくり体験をし、氷点下20度の体験をしました。そして那覇市内のホテル到着後、グループに分かれて国際通りで買い物をしました。最終日の朝は市場で買い物をし、そこからモノレールで空港まで移動

しました。

旅行日程や滞在場所は、生徒たちが2年生の頃から自分たちで企画立案して決めてきました。予定通り順調に進んだ所や、ハプニングで予想外の展開になった所もありますが、これら全てをひっくるめて「思い出になる修学旅行」を経験することができました。



「自立教科担当教員(理療)講習会(教員免許状更新講習を兼ねる)」開催

理療科教員養成施設 施設長代理 **和田恒彦**

理療科教員養成施設では7月17～20日に「理療教育と東京オリンピック・パラリンピック―理療が果たす役割―」をテーマに自立教科等担当教員(理療)講習会(免許状更新講習を兼ねる)を実施した。

本学では東京オリンピック・パラリンピックのボランティアの募集を見据え、「さあ、ボランティアをしよう! 視覚障害者のスポーツボランティア」の発行、「教育戦略推進プロジェクト」により視覚障害者がボランティアになるための準備を推進してきた。

講義内容は、二宮雅也先生(文教大学人間科学部人間科学科准教授)「オリンピック・パラリンピックスportsボランティア」、河合純一先生(日本パラリンピアンズ協会会長)「パラリンピック選手の立場から理療に期待すること」、大野建治先生(上野原市立病院)「ブラインドパラリンピアン」のクラス分け、眼科的課題」渡部厚一先生(本学体育系准教授)「オリンピックパラリンピックと内科的課題・ドーピング」、清水和弘先生(国立スポーツ科学センター研究員)「ハイパフォーマンス・サポートセンターにおける医科学サポート」、宮本俊和先生(本学オリンピック・パラリンピック推進室)「筑波大学におけるスポーツ選手に対する鍼治療」和田恒彦(本学人間系准教授)「理療科とオリンピックパラリンピック」、青木隆一先生(文部科学省初等中等教育局視学官(併)特別支援教育調査官)「理療科教員に求められる専門性とは」だった。

北海道から沖縄県まで全国54校の視覚特別支援学校(盲学校)理療科の教員85名が受講した。



河合純一先生



渡部厚一先生



清水和弘先生

関東甲信越地区 視覚特別支援学校・盲学校 歩行指導者研修会について

附属視覚特別支援学校 中・高等部自立活動 教諭 **明比庄一郎**



1 はじめに

7月23日～27日の5日間、21名の参加者の下、歩行指導者研修会が開催されました。

2 プログラム

「歩行指導における指導法及び理論と実際」という内容から、講義で指導上の配慮や留意点などを理解し、その後の実技体験により、実際にそれらを確認するといった展開になっています。ともに、すべての内容を扱うことは難しいため、指導上不可欠なものを精選し、それらを重点的に行っています。

実技においては、2人一組のペアになり、生徒役と指導者役を交替して行います。生徒役は、アイマスクを着用し指導者役からの説明等を受けてから歩行体験をします。指導者役は、説明方法や観察時の留意点、安全確保等を考慮しながら指導します。双方の立場を体験させるため、実技をできるだけ多く取り入れています。

最終日には、グループディスカッションがあり、研修についての質疑応答や各学校で目頃抱えている課題などについて討議して情報の交換・共有を行いました。

3 終わりに

以下に今回のアンケート回答から抜粋したものを紹介します。

・このように系統的に整理した内容を初任のころに知ることができたら、もっと効率的で充実した授業を組み立てやすかったのと思います。

今後とも、児童・生徒に即した歩行指導の在り方を追求し、外へ出かける歩行の楽しさを伝えていければと思います。

実技 道路横断



平成30年度 筑波大学附属学校教育局主催 「教員研修会」

平成30年度筑波大学附属学校教育局主催「教員研修会」を下記の日程にて開催いたします。

1.日 時:平成31年 2月23日(土) 13:00~14:30

2.会 場:筑波大学東京キャンパス文京校舎 134講義室
(東京都文京区大塚 3-29-1)

3.プログラム

12:30 受付開始

13:00 開会、講師紹介

13:05 講演「学校教育の課題と教育改革の流れ
～東京都の公立学校の実践を通して～」(予定)

講師：東京女子体育大学体育学部教授 出張吉訓

14:30 ポスターセッション

4.参加費 無料

5.申込締切 平成31年1月31日(木)

6.対 象 筑波大学教職員及び学外教育関係者

申し込み・お問い合わせ先

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
筑波大学東京キャンパス事務部 学校支援課 教職員・学事担当
TEL:03-3942-6809 FAX:03-3942-6911

平成30年度 筑波大学附属学校 研究発表会

附属学校教育局では、平成30年度研究発表会を下記の日程にて開催いたします。本学の附属学校並びに附属学校教育局における日頃の研究成果を発表し、皆様にご理解いただくとともに、今後の教育研究活動の一助としていただければと考えております。

日 時:平成31年 2月23日(土) 15:00~17:40

会 場:筑波大学東京キャンパス文京校舎 134講義室
(東京都文京区大塚 3-29-1)

詳細については、今後、附属学校教育局ホームページに掲載しますので、ご確認ください。

【参考:附属学校教育局ホームページ】

<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/>

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.43

発行日……平成30(2018)年 10月31日

発行者……附属学校教育局教育長 茂呂雄二

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広研印刷 使用紙:UJimax [日本製紙]

